

成長する映像文化と交流

映画祭

山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局

宮沢 啓



「山形国際ドキュメンタリー映画祭」は、平成元年の山形市市制施行百周年記念事業の一つとして始まり、普段はなかなか目にするこゝとのできないドキュメンタリー映画を数多く上映する国際的な映画祭として定着し、今年の秋に七回目を迎える。

全国各地の映画祭は、歴史ある大分県の湯布院映画祭」を筆頭に三十以上もあると言われているが、その中でも山形の国際ドキュメンタリー映画祭はどちらかと言えば後発のグループに属する。

そのため、映画祭を企画するに当たっては、先行する映画祭との違いを出すためどんな映画祭にするか、さまざまプランが出された。当時、隣町の上山市には三里塚（現・成田空港）シリーズを撮った後、上山に移住して『日本古屋敷村』や『1000年刻みの日時計』などを製作していた小川プロがあり、その代表であるドキュメンタリー作家の故・小川紳介監督に相談したこともある。その後、検討が重ねられて山形の映画祭はドキュメンタ

リー映画を上映することになったが、のちにこの映画祭がアジアで初めての国際的なドキュメンタリー映画祭であることが確認された。

二年ごとに開催される映画祭には、毎回、国内はもちろん、海外からも熱心な観客が訪れる。しかし、最初から多くの人々が集まったわけではない。わざわざ山形まで出掛けなくてもそのうち東京で上映されるだろうと、言われた時期もあった。

それでも回を重ねるごとに、山形が世界中から集まった最新のドキュメンタリー映画をいち早く見ることのできる「場」であることが知られるようになると、多くの評論家やプレス関係者も詰めかけるようになった。上映される作品数も次第に増え、前回は百八十八作品（この上映本数は国内の映画祭でも多い方に属する）に達している。

さらに、最近は女性監督の作品も増え、応募総数の三割を占めるまでになり、今まで見られなかったテーマや切り口の作品が多数寄

せられるようになり、新しい世界の胎動を感じることもある。こうした作品に接した観客は、新鮮な驚きと多くの共感を得て、すっかりドキュメンタリー映画の虜（こいつ）になってしまった。また、山形では映画の上映だけでなく、その作品を撮った監督が大勢来形し、シンポジウムや、観客からの質疑に答えるなど多彩な交流プログラムも設けられている。観客と監督の交流は、プログラムが終わってから止むことはなく、街角や上映終了後の夜の居酒屋などで深夜まで映画談義に花が咲くこととなる。

観客と監督が「直接会って話す」という出会いや交流は、時間を忘れさせるほどテンションを高め、新しい関係を作っていく。それによって山形の実在は、交流・情報交換の「場」として、特にアジアの監督たちにとって、とても重要な位置を占めるようになった。

こうした映画祭も舞台裏は大勢の市民ボランティアによって支えられている。一握りの市民ボランティアの「私たちの街で催される

初めての国際映画祭をなんとか成功させたい」という思いが始まりの原点だった。前回は、二百名を超す市民ボランティアが県内だけでなく、東京や遠く九州からも手弁当でやって来て運営を担ってもらった。

仕事は、会場でのチケットのもぎりや場内整理などを担当する会場係、ゲストの随行や通訳を担当するアテンド、日々の映画祭に関する情報を掲載する日刊紙「デイリー・ニューズ」の取材編集スタッフ、上映終了後の交流の場を切り盛りし帰りは夜明け近くになってしまう「香味庵クラブ」スタッフ、スクリーンに字幕投影を担当する係や映写の補助など裏方が中心だが、とても重要な仕事ばかりである。

準備は、数カ月間に担当ごとに何度も会議や打ち合わせを重ねて本番に臨む。そして、期間中は、仕事を休んだり子供を実家に預けたりと、その献身ぶりは並々ならぬものである。

このような一人ひとりの力が集結して映画祭は開催される。血の通ったぬくもりのある映画祭」として対外的な評価を受けているのも、こうした地道な努力を続けながら、温かく迎えてくれる市民ボランティアの存在があるからこそである。

今年さらさらに、アメリカからボランティアとして参加したい旨の電子メールも入っており、ボランティアの輪は国境を軽々と越えて広がる方向にある。

次の世代へ引き継ぐ文化資源としての映画祭は、国際化や情報化が当たり前のことになっっている若い世代に、世界中から集まる最新の映像を先入観のない眼でみてもらい、テ



前回の表彰式の様子（「アジア千波万波特別賞」松江哲明監督）

レビや新聞では報道されないことがたくさんある事を眼で、肌で感じてもらうためには絶好の機会である。

今年は、高校生を対象として、「映像ワークショップ」を新たに開催することにした。これは、見るだけでなく作品を制作する過程を体験しながら映画の知識や技術を学んで行くというものである。

完成した作品は、映画祭期間中に高校生自らが運営する上映会場で上映され、来形している海外ゲスト監督からアドバイスを講評を受ける予定である。また、たくさんの上映作品があつてどれを見て良いのか迷ってしまう

という声もあつたため、高校生向けに解説をつけたチラシも併せて制作し、より多くの人々に会場に足を運んでもらえればと思つている。

さらに、国際交流プラザ（山形ビッグウイング）内のフィルムライブラリーには過去に応募された約二千三百作品や、映画祭が購入し輸入したフィルム百二作品が収蔵されており、一部は日常的に県外の上映会や海外映画祭にも貸し出している。館内のビデオブースでは誰でも無料で作品鑑賞ができるほか、映画に関する資料や図書の閲覧コーナーもある。数年前から何人かの学生が卒論のテーマとしてドキュメンタリー映画や山形の映画祭を取上げるようになり、札幌や東京などから泊まり込みでフィルムライブラリーに通つて卒論に必要なビデオや書籍を調べるといった新しい利用法も始まつてきた。

このように山形の映画祭は、さまざまながらを生成しながら今も成長している。今後も地域文化の振興や映像文化の発展のため、さらには国際交流の場として貢献できるように、皆様方の息の長いご支援をお願いしたいと思う。

宮沢 啓

山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局コーディネーター

1954年山形市生まれ。
1989年からボランティアとして映画祭にかかわり、1995年からは映画祭事務局の専従スタッフとなる。